

準に従ってコメントがつけられる点、evaluationのためのbackgroundとして蓄積されるものであるという点、および大部分は専門分野における各人の固有の仕事を統一した形で行なうものであるので個人の負担が大きくなることはないという点から賛成であるという反論もあった。

(2) 熱化グループ(飯島委員)

10月31日における第43回のグループ会合での討議について報告があった。

熱化グループに山室委員を加え、角谷氏(東工大)にオブザーバーとして参加していただくことになった。

(3) 炉定数グループ(坂田委員)

6月-8月上旬にかけて行なわれた炉定数作業について、関係各所よりコメントが寄せられ、手直しをしなければならないとの説明があった。

3. 41年度予算使用状況について(中島委員)

- ・ 計算依頼費6,550,000円のうち4,000,000円はすでに年度当初計算センターへ振り替え済みである。

残2,550,000円から300,000円を旅費追加分として運営費に振り替え、2,250,000円を計算センターへ振り替えることになった。2,250,000円は1,130,000円を予算超過分の補填用(炉定数,熱化グループ)1,000,000円を八谷氏120,000円を五十嵐氏の計算費に振り当てることになった。

4. 人事関係

高橋,桂木両委員の外国出張に伴なり後任の問題については,熱化グループの責任者として飯島委員,炉定数グループは坂田委員ということになることが確認された。

なお,これに関連し,高橋,桂木両委員は帰国後は自然回復ということで不在の間は,坂田,後藤委員を原子力学会シグマ専門委員会委員としていただくより学会企画委員岩城氏を通じて学会への手続を依頼することになった。

5. Seminar on Intense Neutron Sources 出席報告(原研竹腰秀邦氏)
米国 Santa Fe において9月中旬に開催された上記国際会議についての報告があった。(概要は「JNDC=ニュース」No. 3 に収録のためここでは省略する。)

6. Nuclear Data Conference 出席報告 (百田主査)

7. CCDN Committee 出席報告 ()

8. 5th Meeting of INC (IAEA) 出席報告 ()

(6.8については「JNDC=ニュース」No. 3 に報告がなされている。)

9. ENDF/Bについて(五十嵐委員)

最近 ENDF/B の紹介が CCDN から送られて来た。それによると、これまでの ENDF を ENDF/A と呼んでそのまま使うが、それとは別に ENDF/B を作る。この内容は一本の曲線になるように evaluate した data を統一した format に従って格納することを主たる目的とし、各 isotope について one data file とする。但し user が各自の所で持っている data を ENDF/B の一部として使用することも出来るように考慮してある。もし user の手持の data を recommend したい時にはその旨を center に通知する。ENDF/B の内容はこれら recommended data を test したうえで定期的に revise される。

10. 「JNDC=ニュース」No. 3 について(中島委員)

予定されている内容について報告があった。

実質的な内容の方が存在価値を認められるから、例えばバリ会議の提出論文のリストなど網羅的に入れてほしいという要望が強かった。

その他国際会議関係でも、当委員会の今後の活動に係わる重要な決定がなされたような場合にはニュースにのせてほしいという意見もあった。

11. リクエスト・リストについて

資料5.により説明があった。

12. 核データおよび炉定数グループの有機的連けいについて

(五十嵐委員)

10月6日の第13回会合における炉定数グループでの討論を11月10日の核データ・グループの会合で紹介した際、核データ・グループ内からは、この件については、運営委が主導的立場をとってほしいという意見があった旨五十嵐委員から報告があった。

以下次のような意見が出た。

- interest の一致する少グループで仕事をはじめ、できる範囲でできる部分の仕事をして適宜、委員会に報告し、作業として authorize してゆくのがよい。但し、成果は個人の業績とする。
- テーマをはっきり打ち出して関心のある者ではじめてみて、見通しがついた段階で運営委にはかって authorize してもらう。結果は必ず報告する。

13. Evaluation work について (中島委員)

C, Pb の cross section について測定側の standard になる情報を集め、実験方法など比べあって検討してゆきたい。

Taschek, Spaepen からも日本で Pb, C あたりからやってみてはどうかという提案が'65年にあった。

日本でもこの方面の仕事をすすめたいという声のあることを話した結果この秋にもぜひ進めてほしいと再確認されている。

当面Cに重点を置き、4MeVまでの σ_T について、原研のファーストのグループで interest をもっている人々とすすめてみたい。ついでには、百田主査を chief にして委員の仕事として承認してほしい。

以上中島委員から提案と主旨説明があった。

この件について、原研核物理研究室の仕事としてはやれないかという質問があったのに対し、中島委員から、この話はEANDCを通じて話が持ちこまれているし、資料収集や作業の円滑化を図る意味で、シグマ委の仕事の一環

としてほしいと説明があった。

この結果この件は了承された。

14. プログレス・レポートの刊行について(百田主査)

プログレスは、少くとも年1回はEANDCに提出することが要求されている。
'66は3月に出しているが、67年2月にEANDCの会合があるのでそれに間に合わせたい。

今回のからは、間に合わせでなく組織的にまとめてゆきたい。

この点について、中島委員より核データ・グループ内の意見として「間に合わせ仕事になると限られた人へのみ load がきつくかかるので、仕事として組織を通してはっきり authorize してほしいという意見が紹介された。

ついで主査より外国の実状として、ソ連ではIAEA-INDCのメンバーの Dr, Abramov が専任で作っている。UKではハーウェル、オルダマストン、ウィンフリス等の各機関が定期的なプログレス・レポートをそのまま EANDCに提出している。USAではNeutron Cross Sections Advisory Group への報告として定期的に作られており、その secretary を交替で担当して、それが editor になっているという紹介があった。

なおプログレス作成の責任の所在「日本の」という形容詞をつけて手落がないか等の指摘もあった、この点については、大へん取り扱いのむずかしい問題だが、精神は、シグマ委主査並に委員長が、原研理事長、諸大学学長、民間研究所長に対して協力を依頼するという手続きを経て作られるというものであるとする。具体的には幹事会に一任していただくということで了承された。

次回会合：時期と議題については幹事会に一任することになった。